

## 要旨

【研究目的】大学 1 年生女子にライフスキルを組み入れた性教育ロールプレイを実施し、その前後での参加者の性行動にかかわる知識や認知の変化を明らかにすること。

【研究方法】大学 1 年生の女子 8 名を対象に、ブレインストーミング、ディベート式ロールプレイ、講義、コンドームレクチャーを含む性教育プログラムを行い、その前後で自記式質問紙調査を実施した。データ収集内容は、「属性」、「性感染症に関する知識」、「避妊・月経に関する知識」、「コンドームへの態度尺度」、「コンドームネゴシエーション」とした。

【研究結果】参加者の平均年齢は  $18.63 \pm 0.52$  歳 (mean  $\pm$  SD) であった。2 名 (25.0%) の学生が、現在交際相手がいると答えた。3 名 (37.5%) の学生が、セックス経験があると答えた。セックス経験のある学生の平均初交年齢は、 $17.33 \pm 1.59$  歳 (mean  $\pm$  SD) であった。コンドーム使用頻度に関しては、毎回使用している者が 1 名 (33.3%)、毎回とは言えないがそれに近い回数を使用している者が 1 名 (33.3%)、2 回に 1 回も使用していない者が 1 名 (33.3%) であった。またコンドーム所持に関しては、セックス経験のある者全員がパートナーに所持を委ねていると答えた。対応のある t 検定の結果、プログラム前後での「性感染症に関する知識」、「コンドームネゴシエーション」の平均点の有意な上昇が認められた。過去に受けた性教育と本研究での性教育との類似点の内容は、『避妊に関すること』、『コンドームに関すること』、『性感染症に関すること』、『教育方法に関すること』に大別された。相違点の内容は、『ディベート式ロールプレイに関すること』、『教育方法に関すること』、『コンドーム演習に関すること』、『ピルに関すること』に大別された。プログラムの感想の内容は、『ディベート式ロールプレイをすることで得た疑似体験』、『今後の自分のこと』、『避妊の大切さ』、『STD 予防のための知識の内容 (特にコンドームについて)』、『プログラム実施に関する評価』に大別された。

【結論】ディベート式ロールプレイにより疑似体験を提供し、講義形式でコンドームの大切さを伝え、コンドーム演習により手技の獲得を図ったことで、プログラム前後での参加者の性行動にかかわる知識や認知の変化 (性感染症の知識が豊富になること、セックスをする際に異性とセックスや避妊について話し合うことが必要だと考えることができること、セックスをしたくない時や相手が避妊を受け入れない時にはセックスを断ろうと考えることができること) が明らかとなった。また、プログラム後にコンドームへの抵抗感が和らぐという、プログラム前後での参加者の性行動にかかわる認知の変化も推察された。